熊本県立装飾古墳館

研究紀要

第１集

平成４年度

熊本県立装飾古墳館

目　　次

研究紀要刊行にあたって…… 2

《論考》

舟葬説についての一考察…… 3

——熊本県菊池川流域の場合——

（原口　長之）

《資料紹介》

岩原古墳群周辺の採集資料 …… 11

（最上　　敏）

球磨地方の免田式土器…… 17

——熊本県免田町井上隆幸氏コレクション——

（坂口圭太郎）

研究紀要刊行にあたって

館長　原口　長之

中九州は雄大なる自然を誇る阿蘇を中心に、古代より独自の文化を形成してきました。その文化は古墳時代にはいって「装飾古墳」というかたちで、絢爛たる華を開いたといえましょう。

熊本県立装飾古墳館は装飾古墳が密集する、菊池川流域の中心にあたる鹿央町に平成４年４月15日開館しました。開館以来、10万人を超える入館者を数え、いまさらながら歴史に対する多くの人々の関心の高さ、装飾古墳に対する興味の深さに驚かされています。

この度、本館の研究活動の一部を研究紀要としてまとめることにしました。これからの研究活動の一つの指針として、多くの研究者の御意見を賜りたく思っております。どうか、数多くの御意見を寄せられますよう御願いします。また刊行にあたって、資料等の提供に協力を下さった方々、御指導を賜った県教育委員会の皆様にこの紙面をお借りして御礼申し上げます。

舟葬説についての一考察

――熊本県菊池川流域の場合――

原　口　長　之

小　序
1　民俗学の立場から
2　考古学上における舟葬説の経過
3　舟葬観念成立の時期について
4　岩原横穴墓と小原大塚横穴墓
5　舟葬説と古墳壁画
結　び

小　序

舟葬とは舟に遺骸をおさめて葬る方法をいうもので、死者を海のかなたの祖先の国、死者の国に送り帰そうとする習俗であるが、この観念がわが国古代にもあったかどうか、民俗学者はともかくとして考古学者の間では後述するような経過をたどって否定的な意見が多い。

しかし、私はこの30数年来、装飾古墳に関心をもって、その壁画の集成を手がけ、横穴墓等を調査しているうちに舟葬観念の存在を是認しなければ解釈のつかないような構造ないしは図柄にたびたび逢着した。これについては、すでに小論を発表したこともあるが、本館で研究紀要を初めて発行するに当り、これを機会に改めて、わが国古代における舟葬観念の存在について纏めておきたいと思うものである。

1　民俗学の立場から

大林太郎氏の「葬制の起源」によれば、舟葬はポリネシアではサモア、ニュエ、フィジー、ニュージランド、チャタムの諸島、ミクロネシアではヤップ、ヌル、トビ、ソンゴソル、メリアル、ブルの諸島、メラネシアではセント・ジョージア海峡、ニューブリテン島のガゼル半島東岸、ブカ、ブーゲンヴィル島海岸、カニエトに分布し、東南アジアではニコバル島民、ニァス、スマトラのバタク族、セレベス、ニモールなどの例があるとされる。ということはわが国の南方海域に舟葬が広く行われていたということである。

ここで日本人の原郷土の問題について取り上げる余裕はないが、原郷土の有力な説の一つとして南方説があることを想起したい。

日本においてはどうか。松岡静男氏は万葉集巻16（3888）の

おきつ国しらさむ君がしめ屋形
　　黄染のやかた　神の門わたる

を解して、冥界の主となるべき貴人の遺骸をのせた舟が幽すいな峡門を流れて行く、もの凄い光景を敍したものであり、また万葉集巻9（1807）の

勝鹿の真間娘子を詠む歌一首
…波の音の　騒ぐ湊の　奥津城に　妹が臥せる
遠き代に　ありける事を　昨日しも　見けむが如も　思ほゆるかも（歌は筆者補記）

これも水葬を歌ったものであるとされる。[①]

大祓詞によると、人間の犯したくさぐさの罪穢は

…高山の末　短山の末より佐久那太理に落ち多岐つ　速川の瀬に坐す瀬織津比売といふ神　大海原に持ち出でなむ　此く持ち出で往なば　荒潮の八百道の八潮の八百会に坐す速開都比売という神持ち加加呑みてむ　此加加呑みてば　気吹戸に坐す気吹戸主と言ふ神　根国・底国に気吹き放ちてむ　此く気吹き放ちてば　根国・底国に坐す速佐須良比売といふ神・持ちさすらひ失ひてむ　斯く失ひてば…罪という罪は在らじと…

すなわち人間の罪穢は川の神・瀬津織比売 → 海の神・速開都比売 → 気吹戸主 → 根の国・速佐須良比売へとリレー式にはこばれて消されるという、この大祓の詞から古典に出てくる死後の世界、根の国は海のかなたにあったと松前氏は主張される。[②]

以上、代表的な三つの説をあげたが、このほかに柳田国男氏の「海上の道」、松本信広氏の「天の鳥船」説などがあって、民俗学上では舟葬観念の存在は承認を得ているといってよい。

ただ、ここに挙げられたような習俗は、いつの時代まで遡り得るかという点に問題がある。万葉集にしても、大祓詞にしても、それが作られた時点においては確かに舟葬観念の存在を認め得る。従って、それ以前にも行われていたに違いないと想像するが、ではその時点からどれだけ遡り得るかという問題がある。

2　考古学上における舟葬説の経過

考古学の立場から、はじめて舟葬説を提唱したのは後藤守一氏である。氏は西都原出土の埴輪舟に関連して次のように述べられた。[③]

①わが国上代の埋葬施設の中に舟形の棺に遺骸をおさめたものが多いこと。舟形棺とくに舟形石棺はその形制が独木舟に酷似していること。

②北史倭人伝に、わが国上代人の間に行われた葬法について「及葬置屍船上、牽之或以小輿」と記してあり、これは明らかに当時舟葬が行われていたことを示すものである。

③舟葬のほかに家葬も行われ、舟葬は家葬よりも古く行われ、古墳時代後期になって家葬が一般的になった。

④後世「入棺」のことを「舟入」とよび石上神社における御神体奉安の「御舟代」など上代の余韻を残すものである。

これに対して、伊東信雄氏は次のように反駁した。[④]

①舟形石棺は舟を象って作ったとしなければならぬ程、独木舟に似ているだろうか。自分はそうは思わないとして両者の相違を鋭く批判した。鋸が発達していないため板で舟をつくることができず、クリヌキ細工がおこなわれた。人の屍体をいれるに足る長さに丸木をクリヌいて棺箱をつくるとすれば独木舟のごとく見えるのは当然である。舟形石棺の起源は格別の意味をもったものでなく当時の大形の箱としての一般的な形であったに過ぎない。

②北史倭人伝の「及葬置屍船上」の場合の舟は当時のわが国に渡来した支那人が、このクリヌキ棺を見て、舟そのものと考えて書いたものである。

③入棺のことを舟入というのは、ふねということばは必ずしもshipのみを意味するのでなく酒漕（さかぶね）・湯漕（ゆぶね）などの用語の示すように容器を示すものであるから舟入とは箱入即入棺の意味を示すもので、何等舟葬説を支持するものではない。

1946年には京都大学の小林行雄氏が大阪府南天

平塚や黄金塚で割竹形木棺の前後に円板をあてた例があることなどを指摘し舟葬説への疑問を表明された。[5]

こうして後藤守一氏の発言は否定されたまま現在に及んでいる。1992年5月発行された日本考古学用語辞典にも著者の斎藤忠氏は「日本古代において実際舟葬があったかは明らかでない」として否定的な見解を述べておられる。[6]

3　舟葬観念成立の時期について

今まで舟葬説についての経過を過剰と思われるまで辿って来たが、その理由は後藤、伊東両氏が立論の重要な根拠とされたことが舟形石棺にあったということを確認したいためであった。

舟形は石棺にしろ木棺にしろ古墳時代前期の後半から中期にわたって行われたものであることは一般の承認するところである。[7]

しかして、この時期が果して舟葬説を成立せしめるにふさわしいまでに来世観、他界観が成熟していた時期と言ってよいものかどうかについて検討する必要がある。

古墳時代における葬送観念の推移について学界の通説[8]を要約すると、次のように言うことができよう。

前期においては生と死の区別がまだ明らかでなく、死とは霊魂が肉体から離れるためにおこるのであるから呪術・鎮魂の法で遊離した魂を引き戻せば肉体は蘇生すると考えられた。従って葬送の儀礼はもっぱら霊魂の処理を中心に行われ、死後の世界についての観念はなかった。

中期中葉ごろから次第に今までと違った考え方が生まれて来た。死者は死後においても現世とおなじ生活を営むものであるとする新しい観念が発生した。

後期になると、はっきりと死後の世界が確立される。横穴式石室が急激に普遍化し、従来の鎮魂的・呪術的副葬品にかわって馬具・土器類・各種の金銅製品など死後の生活における実用的なものが目立ってくる。石室は広大となり、2室、3室をそなえたものまであらわれ黄泉の国で死後の生活を営むにふさわしいものとなってくる。

それが地下にあるにせよ、天上にあるにせよ、また海のかなたにあるにせよ、とにかく死後の世界についての観念が成熟して来たのは後期の時代である。

とすれば、まだ他界観念の未成熟な前期末〜中期の埋葬施設である舟形石棺に舟葬説の成立を期待するのは無理であって、舟葬観念の成立は、時期を下して古墳時代後期にもっていくべきであると考える。

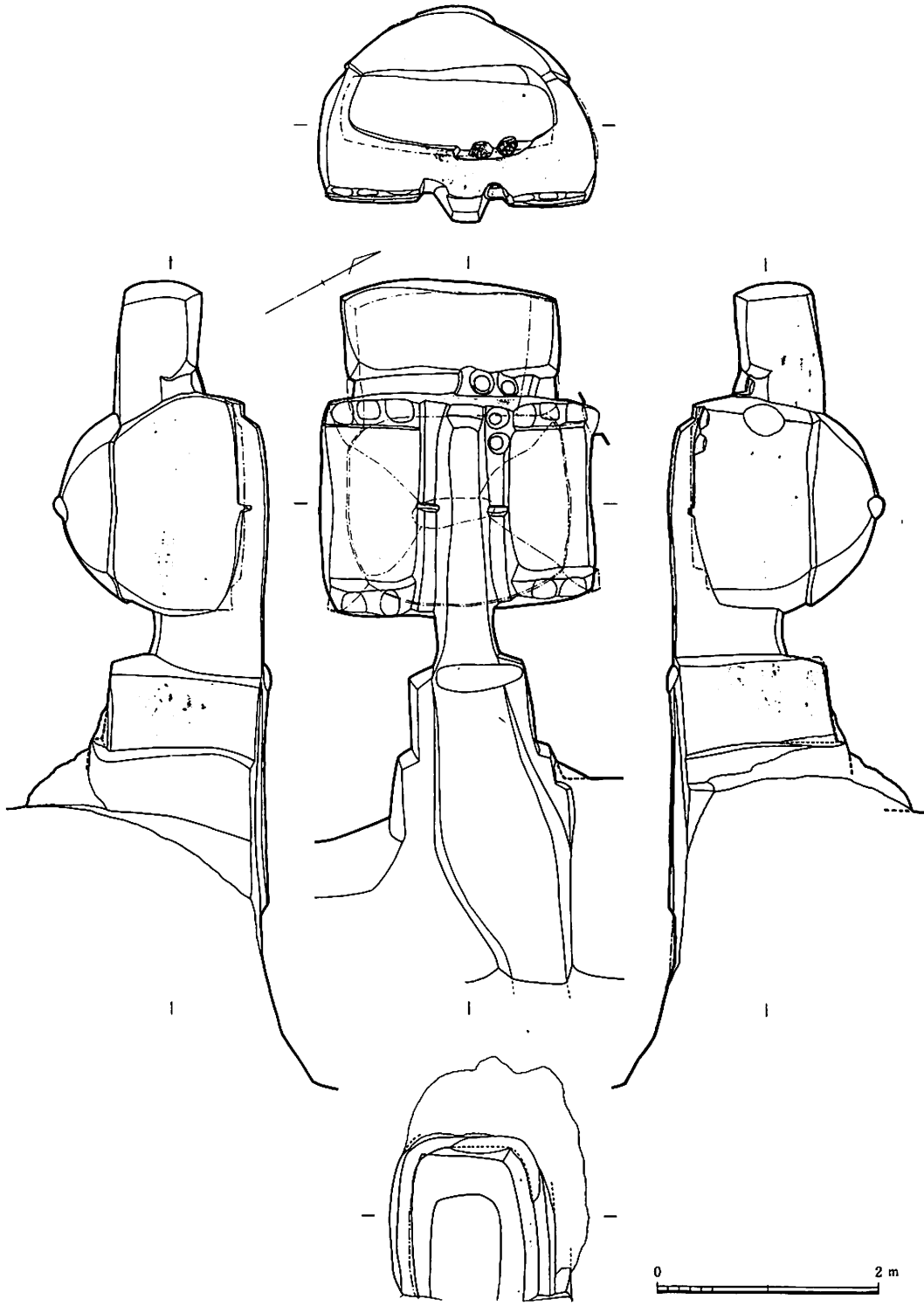
4　岩原横穴墓と小原大塚横穴墓

前者は鹿本郡鹿央町大字岩原に、後者は山鹿市大字小原にある。

山鹿・隈府盆地の西を限る台地に岩原台地と志々岐台地がある。この二つの台地は春間—長岩の低地をあいだにはさんで南と北に対向している。どちらも台地の裾は阿蘇溶岩の絶壁となっていて、その絶壁に横穴墓群が開口する。岩原台地がわに岩原横穴墓群131基、浦田横穴墓群5基、志々岐台地がわに長岩横穴墓群122基、小原大塚横穴墓群104基がある。これらの4群はともに、その中に彫刻の装飾をもつ横穴墓を交えている。

ここで取り上げようとする横穴墓は岩原横穴墓群中の第Ⅰ－14号墳である。

第Ⅰ－14号墳は阿蘇溶岩の崖面、平地から約10mの高さのところに南東にむけて開口している。羨道・羨門・主室より成る。主室の床面形は間口約2.5m、奥行約2.9mの矩形をなす。床面から天



岩原Ⅰ－14号横穴墓実測図
（「熊本県装飾古墳総合調査報告書」より）

井までの高さは、最高の部位で約1.5m、天井はドーム状をしているが屋根をかたどって屋根と四壁との境を示すための段がのこり、羨道と直角の方向に棟を刻んであり、寄棟平入の家屋を意識して構築されている。

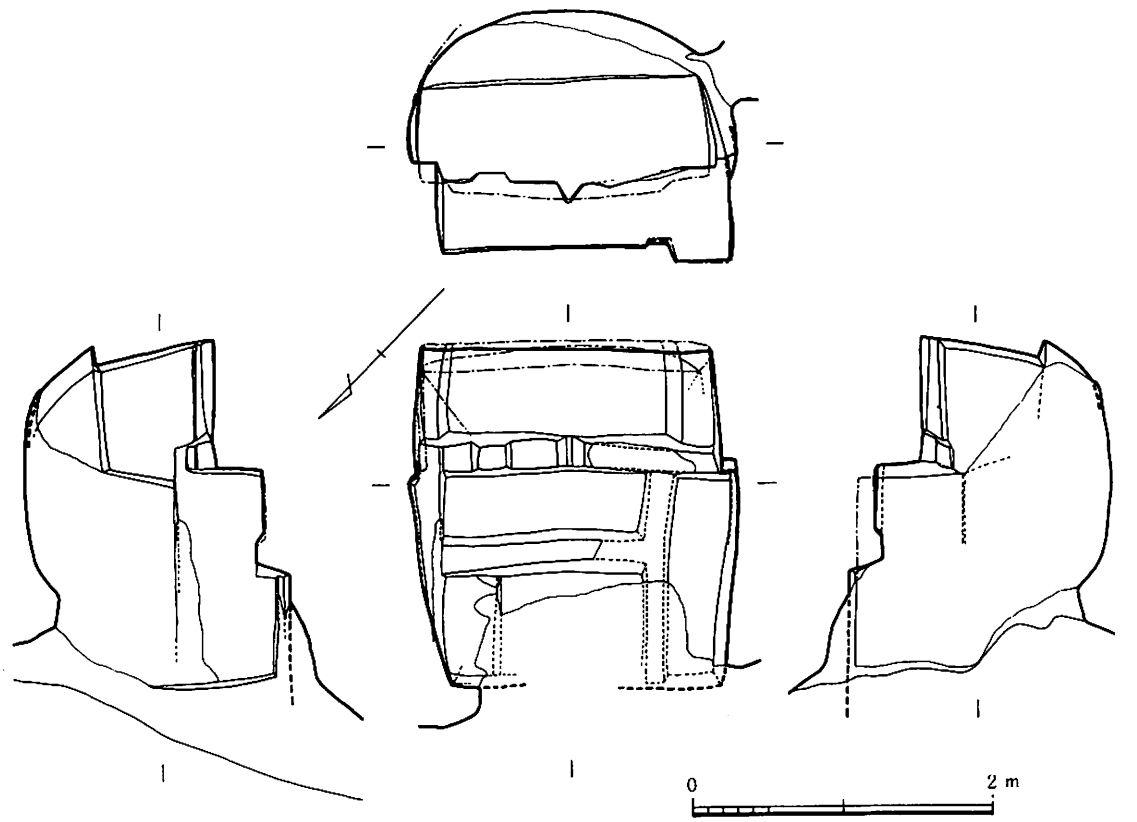
主室の奥壁をくりこんで屍床を作ってある。屍床のくりこみが大きいので、平面図でみると主室、前室に区分された複室墳のように見えるが、これはこの地方における他の横穴墓の例と比較した場合、明らかに一室の中に屍床を設けたと考えるのが妥当である。

奥壁の屍床は一段高く設けられ、屍床の前面の縁に2個の突起が造り出してある。突起の直径は脚部で21cmと20cm、上面の直径はどちらも約8cm、立ち上りが10cmある。開口が古く遺物の伝わるものはない。

小原大塚横穴墓群中にこれと類似の横穴墓がある。この横穴墓群は総数104基あり、その中の第93号がそれである。地上約5mの崖面に西にむかって開口する。落盤によって羨道、羨門を失い主室だけが残っている。

主室の床面形は間口約1.9mで、大体において正方形をしている。屍床は羨道と直角の方向に2面ないし3面あって、奥壁ぞいの屍床をもっとも高く造り、階段状に一面ずつ下げて造る。

床面から天井までの高さは最高の部位で約1.5



小原大塚93号横穴墓実測図
（「熊本県装飾古墳総合調査報告書」より）

m。天井はまるみを持っているが、やや扁平で四壁と天井部の境を示す段は殊に大きく刻まれている。棟の方向を示す天井の刻みはない。

奥壁ぞいの、もっとも高いところに造られている屍床の前面の縁に岩原オⅠ－14号と類似する突起がある。突起は1個で脚部の直径25cm、上面の直径23cm、立ち上り5cmで角塔に近い感じてある。なお、岩原も小原大塚横穴墓も、奥壁ぞいの突起をもつ屍床の前面の縁（区切り）はあだかもゴンドラ形の舟を思わせるように両端が反り上っている。

さて上述の突起は何を意味するものであろうか。

私ははじめ、岩原横穴墓でこの突起を発見した瞬間に西都原出土の埴輪舟における櫓臍（櫂臍）を想起した。かつて京都大学の梅原末治氏が熊本県石貫村穴観音横穴墓の屍床を敍して、「舟形若しくは長き凹字形という可き縁を附せり[9]」と言われたように屍床の縁は、ゆるやかに両端のそりあがった舟形をしている。そしてその縁の右よりに突起がある。いかにも櫓臍にふさわしい位置である。

しかし、この突起を直ちに西都原の埴輪舟と結びつけることは無理である。西都原の場合は準構造船もしくは構造船とよばれるべきもので、岩原、小原大塚などの遠く及ぶところではない。とすれば何と解釈すべきであろうか。

死者を祭る灯明皿をのせる台とするか。福岡県王塚古墳[10]に奥壁に接して2人用の屍床があって、その前面左右に整然と灯明台が立っている。しかし、岩原の場合、突起が灯明台であるとするためには、突起の上面が灯明皿を置くに適するよう平坦であることが必要であろう。然るにこの突起の上面は尖るとまではいわないまでも平坦で灯明皿をおくに適する状態にあるとは決して言えない。

また灯明皿が2個ということであれば王塚古墳におけるように、ほどよい場所に左右相整うように配置するのが普通であろうと思われるが、この2個の突起は屍床の右側に偏している。灯明台としては不適当であろうと思う。

次に考えたのは排水溝の切り残しが突起として残存したのかも知れないということである。横穴墓の屍床の縁に排水のための溝が刻みこまれているのはよく見かけるところであるが、その場合の排水溝は主室内の中央に設けられた参道に流れこみ、それが羨門外に導かれるというのが通例である。そうしないと折角の水が下の段の屍床に流れこむということになりかねないからである。また排水溝とすれば2個の突起をはさんで2か所も溝を掘る必要はない訳である。

以上の点からこの突起は舟の櫓臍を意識してつくり出したものであるとして差支えなかろうと思う。

小原大塚横穴墓における突起は岩原の場合とちがって断面は角塔に近く上面は灯明皿をのせ得る平坦さをもっている。しかしこの場合、玄室内の屍床の配置が問題になる。2面～3面の屍床は羨道に対して直角の方向に並列して設けられていて参道がない。奥壁上段の死者を祭るためには他の遺骸を踏みこえて行かなければならぬという不都合がある。灯明台が必要であるとすれば羨門附近又は羨道に設けるのが当然であろう。突起が低く、角塔に近くなり、形式化しているけれども櫓臍の退化形態とすべきであろうと考える。

以上の解釈のもとに、この施設こそは舟葬観念の存在を立証する最も有力な証拠であろうと信ずる。

5　舟葬説と古墳壁画

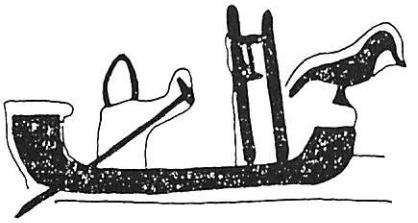
前項において横穴墓における屍床の突起が舟葬観念の存在を立証するものではないかということ

について述べたが古墳壁画の中にこれを支援する文様がいくつかある。

熊本県山鹿市弁慶が穴古墳に下図のような図柄がある。被葬者の葬送時の情景を描いたものであろう。これを舟上に柩をおき、その柩におさめられた死者の魂を象徴する鳥を柩にとまらせたと解するならば下方の馬と舟は殉葬或いは副葬品として解釈することも容易である。被葬者の霊魂を象徴する鳥の観念については書紀における日本武尊の白鳥三陵の神話も想起されて興味が深い。[11]

福岡県の珍敷塚古墳の図柄は森貞次郎氏がいわれるように「神話の天の鳥船を思わせる船、太陽、月などの絵画は死者の霊を死後の世界に送り安住させようとする葬送儀礼の表現であり、死者に対する永遠の生活の安息のための供献でもあったろう[12]」とされるものである。

熊本・弁慶が穴壁画



福岡・珍敷塚壁画

福岡・鳥船塚壁画

同じく吉井町にある鳥船塚の壁画は「船の舳艫の両端には船の方向を向いた鳥がとまっており、船上は艫より櫂をあやつる人物がいる。船上の両端に高い建てものがあるのは帆とみるよりも、幡をあらわすとみた方が適当であろう[13]」とされる。

この他にも古墳壁画における舟の図柄は多い。斉藤忠氏は舟の図柄として25例をあげられたが[14]、この中で鳥や柩（荷）は添えないまでも舟葬の意を托したものかも知れないと思われるものがある。最近発見された熊本県小原大塚横穴墓においては、羨道の側壁にゴンドラ形の舟を大きく陰刻している。熊本県玉名市ナギノ横穴墓第10号の石屋形の屋根には船の形が刻んである[15]。それらの図柄は、その存在する場所から言って葬送のための図柄であると考えられる。

以上の壁画はいずれも舟葬観念の存在を物語るもので、殊に弁慶が穴古墳のごとき隋書倭国伝の記事そのままの情景を示していると言えよう。

これらの壁画をもつ古墳はいづれも巨石使用の横穴式石室であって、古墳時代後期に属するものであり、岩原、小原大塚の横穴墓群が後期終末期のものであることは言うまでもない。

以上のことから古墳時代後期には舟葬観念が成立していたことを確言できよう。それが認めらるれば第一項で紹介した民俗学上の事例ともさほど無理なく結びつくことが可能である。

ただことわっておかねばならぬことは、舟葬観念がわが国上代の風習の一般であったと言おうとするものではないと云うことである。現在のところ古墳時代後期、北部九州または、中九州に点在していたと言うより以上言えないからである。今後の資料の増加によって或いは西日本の太平洋沿岸

にまで点々とのびるかも知れないとは考えている。

結　び

この小論は舟葬成立の時期を古墳後期までさげることによって従来の論争点をはずし、民俗学の成果を念頭におきながら横穴墓屍床の突起と古墳壁画の解釈をもとに、一度否定された舟葬説の復活をはかろうとしたものである。所期の目的を達し得たかどうかを懸念するが、先学の御叱正を得てその補強を期したい。

註①松岡靜雄「太平洋民族誌」同「日本古俗誌」
②松前健「日本神話の新研究」
③後藤守一「西都原発掘埴輪舟　その二」考古学雑誌第25巻第９号
④伊藤信雄「日本上代舟葬説への疑問」考古学雑誌第25巻第12号
⑤小林行雄「日本古墳の舟葬説について」西宮第３号
⑥斎藤忠「日本考古用語辞典」
⑦日本考古学協会編「日本考古学辞典」
⑧数書があるが世界考古学大系３所収の亀井正道氏「信仰から礼儀へ」を参照した
⑨浜田耕作・梅原末治「石貫村穴観音横穴」熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第四冊
⑩梅原末治・小林行雄「筑前国嘉穂郡王塚装飾古墳」京都帝国大学文学部考古学研究報告第十五冊
⑪原口長之「装飾古墳弁慶が穴調査報告」熊本史学第11号
⑫森貞次郎「珍敷塚古墳」装飾古墳所収　図文の挿図は斉藤忠「古墳壁画」日本原始美術５によった
⑬森貞次郎「鳥船塚古墳」以下同上
⑭斉藤忠「古墳壁画」日本原始美術５
⑮浜田耕作・梅原末治「石貫村ナギノ横穴群」前掲書

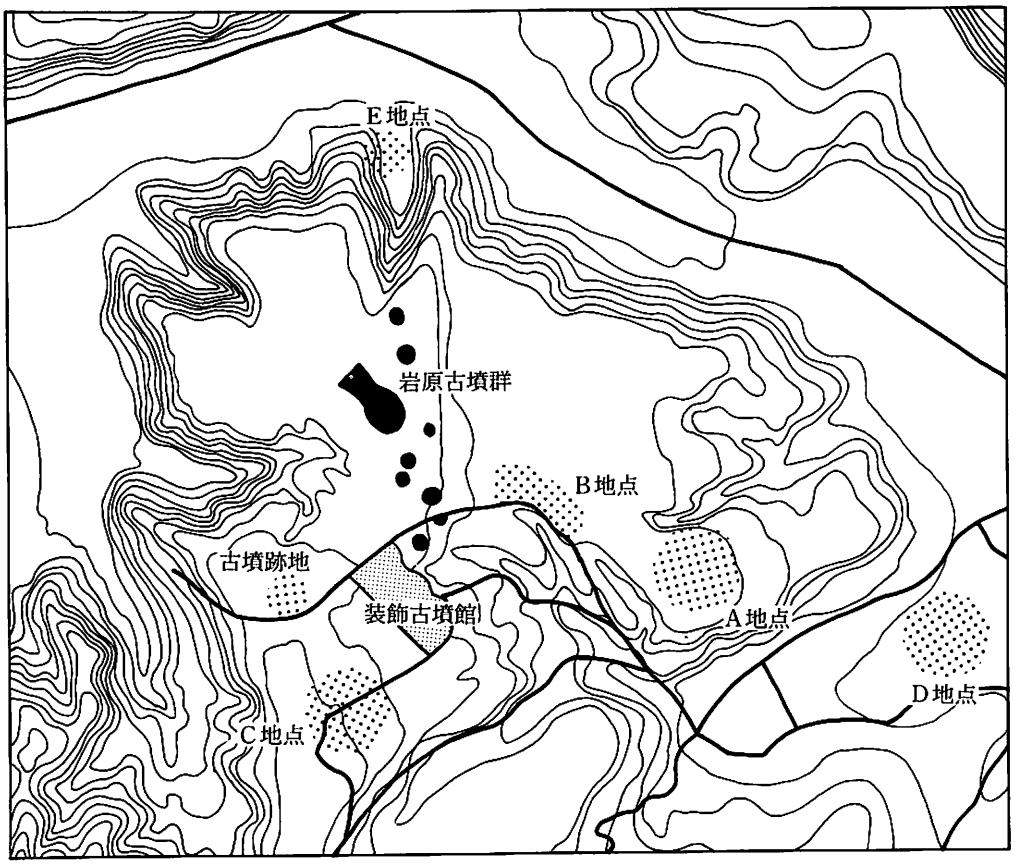
岩原古墳群周辺の採集資料

文化財保護主事　最　上　　敏

1．はじめに

米野山（標高311.8m）の北麓に東西約1000m、南北約700mの広大な岩原台地がある。この台地には、双子塚古墳をはじめとする岩原古墳群があり、通称「四十八塚」とも呼ばれるほど、かなりの古墳や石棺墓があったらしく、現在でも数箇所、石棺墓が埋蔵されている地点を確認できる。また、この台地の周辺には、岩原横穴墓群、長岩横穴墓群、桜ノ上横穴墓群などがあり、総数400基あまりからなる横穴墓の集中地域である。

このような歴史的環境の中に県立装飾古墳館は建設されたが、開館を機に地元の小学生を中心に、埋蔵文化財に対する興味・関心が高まりつつあり、多くの土器や石器が館に寄せられている。特に、立山淳一君、立山賢志君らの活躍には目を見張るものがあり、この台地に古くは先土器時代から人



岩原古墳群周辺遺跡分布図

類の歴史が残されていることなども明らかになってきた。

そこで、館内外から寄せられた資料を通して、岩原古墳群周辺の遺跡を紹介したい。なお、採集資料であるため破損が激しく、土器など図化できるものが少なく、ほんの一部しか紹介できなかったことを断わっておきたい。

2．遺跡紹介

A地点

坂の上と呼ばれる地点で、台地の東部にある。横長剝片を素材としたナイフ形石器が採集されている。その他、黒耀石製の剝片や土師器片も多く見られる。鹿央町文化財保護委員立山義晶氏によれば、この地点には、現在、2基の石棺墓と、直径1m程度の石積遺構（地元では塚と呼ばれている）があり、過去において畑地開発により、数基の石棺墓が破壊されたそうである。

B地点

中道と呼ばれる地点で、台地の縁辺部にある。すぐ下には谷部が入り込んでおり、館の園路として整備されている。最近まで桑畑として利用されていたが、現在は桑の木すべてが抜かれており、その作業によりかなりの資料が土中から姿を表した。

先土器時代のナイフ形石器、スクレイパー、縄文時代の石鏃、石匙、スクレイパー、ドリル、扁平打製石斧、弥生時代の石包丁、古墳時代から歴史時代にかけての土師器類など、各時期を通じて多くの資料が出土している。

その中でも一番多く採集されているのは、縄文時代の資料である。佐賀県腰岳産の黒耀石を素材としたと思われる剝片がかなり多く、その他、製品となる資料も他の地点と比べて一番多い。ただし、縄文土器は採集されておらず、時期の判断をする上で支障となっている。

C地点

館の南側にあり、寒原と呼ばれている地点である。台地の中では標高が一番高い。この周辺は20年ほど前、圃場整備が行われており、かなりの掘削や土の移動が行われている。現在は、スイカ、メロンや梨栽培用のビニールハウスが建ち並んでおり、他は各種野菜栽培用の畑として利用されている。

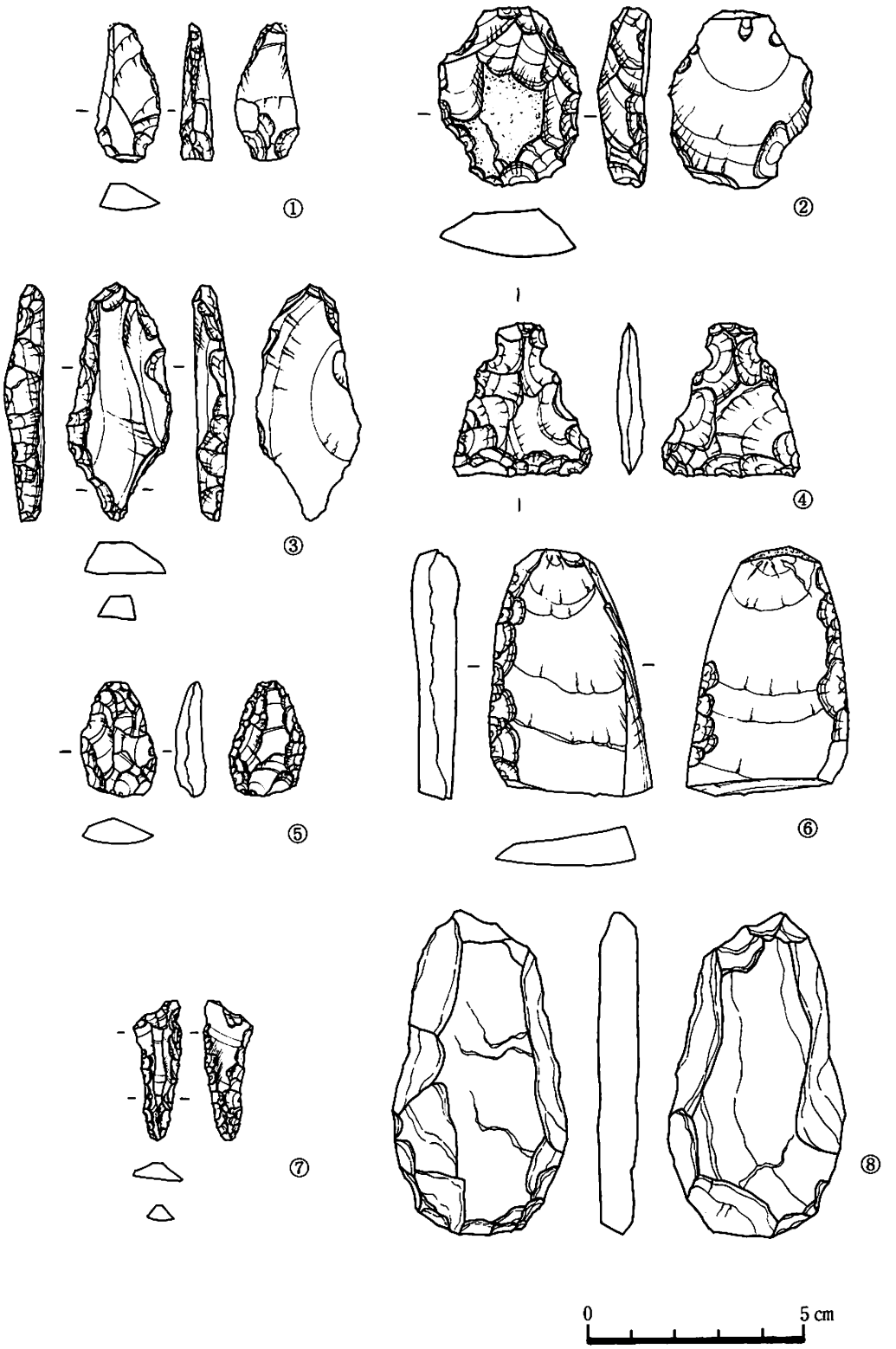
縄文時代の剝片や磨石、石皿、敲石、くぼみ石などの他、弥生時代の中期から後期にかけての甕形土器、また、円筒埴輪や甑の破片なども採集されている。礫器類は、ビニールハウス横の畦から多くの採集されている。畑を耕作する際に邪魔になった礫がまとめて捨てられており、その中に含まれていたものと考えられる。

問題となるのが円筒埴輪の破片である。これも畦から発見されており、原位置を保っていないと思われるが、通常古墳の周辺からしか出土しない資料である。直線距離にして100mほど離れた地点に、圃場整備の際、調査され、撤去された古墳があったという。その周辺には現在でも葺石として使われたと思われる人頭大の礫が確認できる。その破片も、失われた古墳に伴うものとも考えることができるが、「四十八塚」と呼ばれる地域であるため、他に古墳がなかったなど調査する必要がある。

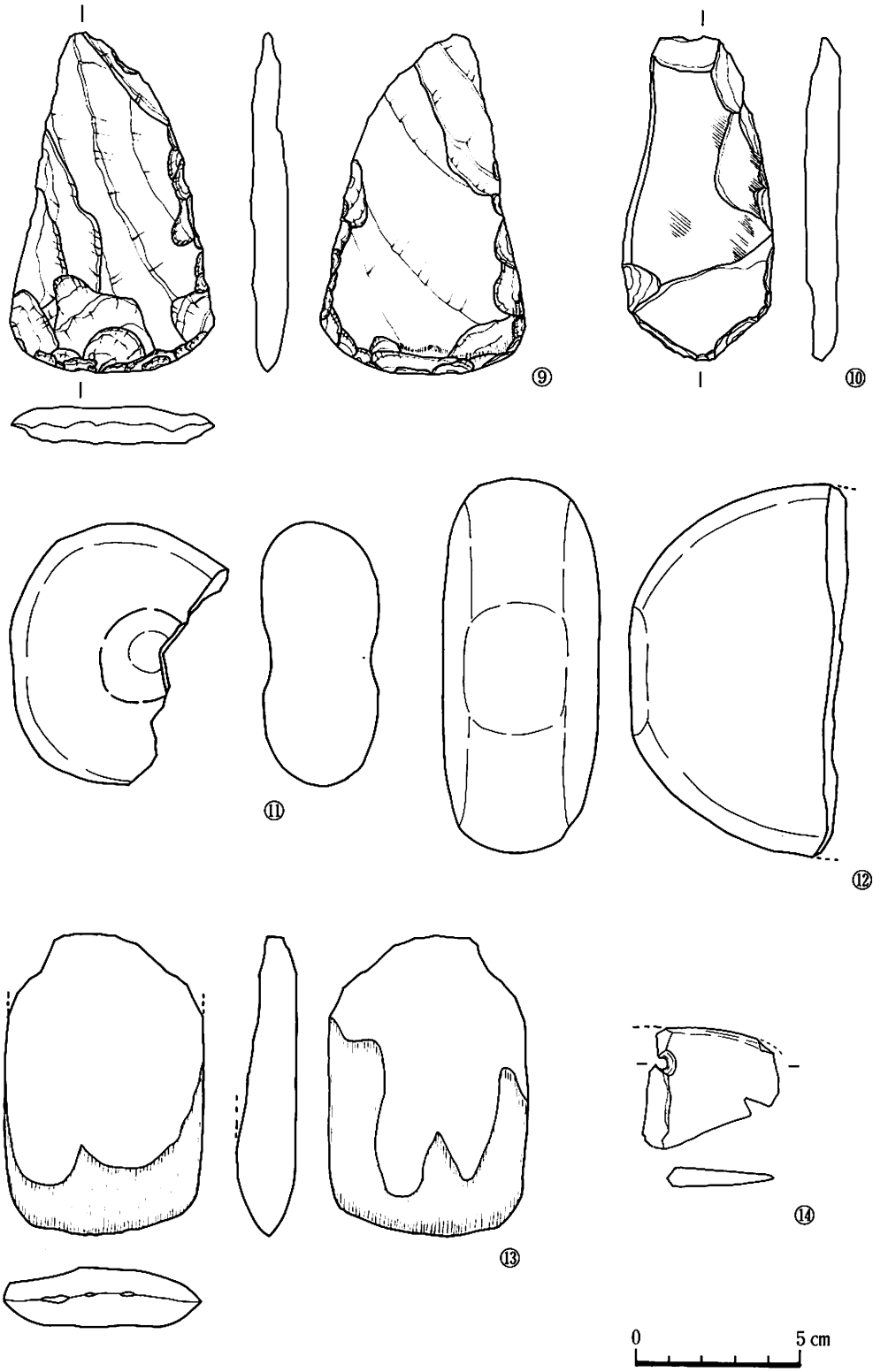
D地点

台地から下りた、古原と呼ばれる地点である。岩原川の支流によって微高地が侵食されているが、その南側にこの遺跡はある。

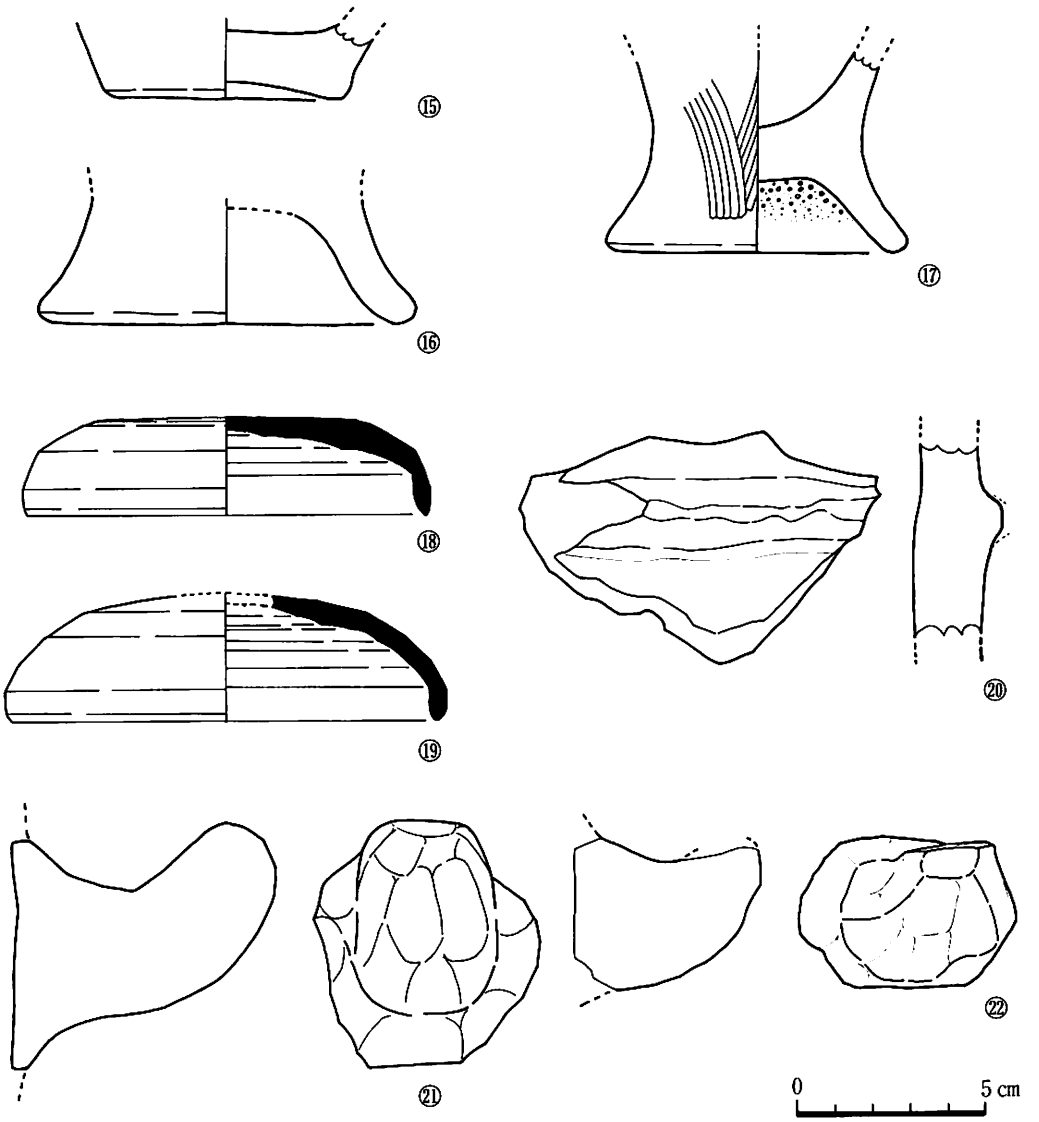
縄文時代の石匙、扁平打製石斧の他、弥生時代中期から後期にかけての多数の土器などが採集されている。弥生土器について言えば、図化できる資料は少ないものの、日用雑器はもちろん、甕棺



岩原古墳群周辺採集遺物 (1)



岩原古墳群周辺採集遺物 (2)



岩原古墳群周辺採集遺物 (3)

として利用されたものや、朱が塗られた祭祀用のものも含まれている。

E地点

台地の北側斜面にある、岩原横穴墓群の第Ⅰグループの地点である。現在、見学コースとして駐車場も備え整備されている。

この横穴墓群がある斜面の一部が土砂崩れをおこし、その中から10点程の須恵器や土師器などの資料が採集されている。いずれも古墳時代のものであるが、6世紀終末の時期と考えられる杯の蓋が2点ある。その他2点ほど円筒埴輪と思われる破片が採集されている。横穴墓に円筒埴輪が伴った例はなく、どのように解釈すべきかが今後の課題となる。

3．採集資料観察表

石器

	名　称	時　代	採集者	採集地	最大長 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	石　材	備　考
1	ナイフ形石器	先土器	立山淳一	B	3.1	1.5	0.7	安山岩	
2	スクレイパー	〃	〃	B	4.1	3.3	1.2	〃	
3	ナイフ形石器	〃	〃	A	5.4	2.4	0.9	〃	横長剝片素材
4	石　匙	縄　文	立山賢志	D	3.5	3.1	0.6	〃	
5	石　鏃	〃	〃	B	2.6	1.7	0.7	黒耀石	腰岳産か？
6	スクレイパー	〃	立山淳一	B	5.7	3.7	1.1	安山岩	
7	ドリル	〃	立山賢志	B	3.2	1.1	0.4	黒耀石	腰岳産か？
8	扁平打製石斧	〃	〃	D	—	4.0	0.9	緑色片岩	先端部つぶれあり
9	〃	〃	古墳館	D	10.2	6.2	1.1	安山岩	先端部に磨耗痕あり
10	〃	〃	立山賢志	D	9.7	4.5	1.0	〃	使用痕あり
11	くぼみ石	〃	石丸　恵	C	7.9	—	3.5	〃	一部欠損
12	敲　石	〃	鳥飼啓介	C	—	—	4.7	〃	磨石としても利用
13	磨製石斧	弥生？	立山賢志	D	—	5.9	—	〃	磨きの及ばない部分あり
14	石包丁	弥　生	立山淳一	B	—	—	—	粘板岩	

土器

	名　称	時　代	採集者	採集地	焼成	色調	調　整	胎　土
15	甕形土器	弥生・中期	古墳館	C	良	茶褐色	内外面ともナデ	1～3㎜の砂粒を多量に含む
16	〃	弥生・後期	鳥飼啓介	C	〃	黄褐色	〃	〃
17	〃	〃	宮崎　俊	C	〃	〃	内面ナデ 外面縦方向のハケ	〃　脚内面に砂粒付着
18	須恵器 杯蓋	6世紀末	古墳館	E	〃	黒灰色	内外面ともヘラケズリ後ナデ	1㎜程度の砂粒を含む
19	〃	〃	〃	E	〃	〃	〃	〃
20	円筒埴輪	古　墳	石丸泰弘	C	〃	赤褐色	内面横方向のハケ 外面ナデ	砂粒はほとんど含まず
21	甑	歴　史	下田ともあき	C	〃	黄褐色	ナデ	1～2㎜程度の砂粒を多量に含む
22	〃	〃	古墳館	B	〃	〃	〃	〃

4．おわりに

簡単に紹介を行ったが、岩原台地及びその周辺には他にもかなりの埋蔵文化財包含地があると予想される。今後も機会を見つけ資料の収集及び報告並びに遺跡の保護へと目を向けていきたい。

球磨地方における免田式土器

——井上隆幸氏コレクションから——

坂　口　圭太郎

1．はじめに
2．井上隆幸氏コレクションについて
3．免田式土器について
4．おわりに

1．はじめに

免田式土器は熊本県球磨郡免田町で発見された、ソロバン玉状の胴部と真っ直ぐに伸びた頸をもつプロポーションの器形と胴部に描かれた重弧文を特徴とする土器である。またその器面に彩色されたベンガラの赤は、免田式土器が何らかの祭祀に伴って作られ、また使用された事を物語っている。近年の発掘調査の増加に伴い、今まで遺構から切り離されて研究が進められてきたこの土器が、どの様な性格を持っているのか、推測できうる資料が増えてきた事は、大変喜ばしい事である。

免田式土器の研究は1932年小林久雄氏の『考古学』３巻１号の発表に始まるとされる。
しかし、それ以前の大正時代に遡ってその存在は確認されていた。(注1)

その後、乙益重隆氏や、高田素次氏により、次々と新資料の発表が行われた。しかし、この時点では一群の土器の名称について統一した意見はなく、戦前における弥生土器の集大成として刊行された『弥生式土器聚成図録』のなかで、弥生前期の重弧文土器との区別から、小林久雄氏が免田式土器の呼称を用い今日に至っている。(注2)

戦後における免田式土器の研究は、市房隠遺跡の調査に始まり、(注3) その調査結果を踏まえて乙益氏は東九州に分布する櫛描文系土器との関係について指摘した。(注4)

また、森貞次郎氏は『日本の考古学』IIIのなかで、免田式土器を弥生終末まで継続すると指摘している。さらに乙益氏は鏡山猛氏と共同で『新版考古学講座』４　原史文化で九州各地の土器との関連を論及している。

乙益氏や森氏の発表を受けて、緒方勉氏は、『熊本史学』第35・36号で、御船町の南原遺跡と下山神遺跡の調査結果から、乙益氏の編年について疑問をなげかけている。

1983年には宮崎県高千穂町で日・豊・肥・古文化研究会が開かれ、各地域の研究者によって事例報告等が行われた。(注5)

ついで、1984年には、熊本県人吉市で肥後考古学会と鹿児島考古学会の連合学会が開かれ、「免田式土器の諸問題」のテーマで集落と墓制の両面からアプローチが行われた。

その後も、熊本県文化課を中心に発掘調査が行われ、今日に到っている。

2．井上隆幸氏コレクションについて（図１・写真１）

ここに報告する資料は1953年以前に井上猪一郎氏により収集された資料であり、現在は遍照寺（免田町大正1712）住職の井上隆幸氏が所蔵保

管されているものである。(注6) 紹介する遺物は1点を除き出土地および出土状況については、不明である。

小型壺形土器（図1－1）小型の壺である。

頸部よりわずかに外反する口縁をもつ。胴部はやや肩の張りが強く底部に近づくにつれて、やや尖りぎみになる。

調整は、外面において頸部から口縁にかけては横ナデ仕上げを施す。胴部上半に刷毛目調整が見られるが、下半は指ナデによって仕上げている。口縁端部は丸みをもつ。内面において、底より頸近くまで削りあげるように強い刷毛目調整が見られる。器高13.0cm・胴部最大径11.3cm　口縁径6.0cm

壺形土器（図1－2）袋状口縁をもつ壺である。

頸部よりやや外反しながら立ち上がり内面に膨らみをもちつつ「く」の字に内側に向かって屈曲する。頸部のつけねに貼り付け突帯を一条まわす。胴部はやや角張った球形を呈し、底部の形状はややレンズ状の膨らみをもつ平底を成す。

調整は、外面全体に刷毛目を施す。口縁部は横ナデ仕上げを施す。頸部の突帯は横ナデにより、シャープに作りだされている。内面においては、頸部付近まで、底より頸近くまで削りあげるように、強い刷毛目調整が見られる。頸部のつけねから口縁に向かってナデによる調整を施す。

器高31.0cm・胴部最大径23.6cm・口縁径11.4cm

壺形土器（図1－3）ソロバン玉状の胴部をもつ土器である。

頸部と胴部下半を欠損する。頸部つけねより、下方にむかって14本の沈線をもつ。5本目から7本目の沈線の上から爪により、刻み目を施す。胴部の最も張り出した部位においても同様の刻み目を施す。また、棒状工具を用いた沈線により、重弧文を施す。

調整は、外面全体にミガキを施す。外面にベンガラの塗布は見られない。内面は剝離がひどくて細かな調整等は確認できない。現高18.0cm・胴部最大径21.5cm

※外面に「昭和廿三年八月十二日免田町下乙本目」内面に「23，8，12日　川ノ堤ニ於テ」と墨書されている。

壺形土器（図1－4）ソロバン玉状の胴部をもつ土器である。

頸部を欠損する。頸部つけねより、下方にむかって5本の沈線をもつ。胴部の最も張り出した部位において爪により、刻み目を施す。沈線と刻み目のあいだに棒状工具を用いた沈線により重弧文を施こす。

調整は、外面において胴部下半は刷毛目調整後、指によるナデ仕上げを施す。胴部上半についてはナデ仕上げを施す。内面は指ナデによる調整を施す。底部に指頭圧痕がわずかに認められる。現高9.2cm・胴部最大径8.4cm

3．免田式土器について

免田式土器はその特異なプロポーションと流麗な重弧文により飾られた美しい土器として古くから知られてきた。そのことにより考古学の研究者のみならずおおくの人に関心をもたれるにいたった。ゆえに土器だけが一人歩きしてしまったことは否めない。しかし、近年の発掘における資料の増加は今まで沈滞しがちであった免田式土器の研究に多くの判断材料を与えてくれる。そこで、近年におけるいくつかの事例を踏まえ考えてみたい。昭和56年から昭和57年にかけて、熊本県文化課により発掘が行われた熊本県山江村大丸・藤ノ迫遺跡の調査で、木崎氏は集落祭祀から墓地祭祀への変遷を述べている。(注7) また同年、調査された宮崎市中岡遺跡は土器製産遺跡として知られているが、

ここでも免田式土器が検出されている。また熊本県小川町大坪貝塚出土の免田式土器は文様が施文後消されており、その意味するところについて、今後検討が必要であろう。(注8)

昭和57年と昭和58年の熊本県阿蘇町下山西遺跡の調査では、免田式土器の異なった出土のあり方について重要視される。昭和63年から平成2年にかけて調査が行われた熊本県嘉島町二子塚遺跡からは、大量の免田式土器が検出されており、平成元年と平成2年に調査が行われた熊本県錦町夏女遺跡、平成3年調査の熊本県阿蘇町柏木谷遺跡はともに本報告が待たれるところである。

以上、近年調査された関連の遺跡の概略を述べてきたが、免田式土器についてそのセット関係および編年について考える材料はかなりの量がそろってきている。いずれ機会をとらえて、同じ遺跡における重弧文を有する土器と有しない土器との関連を遺跡と結び付けて考えてみたい。

4．おわりに

今回の資料紹介は個人所蔵で未発表の資料に焦点を絞ってみました。研究の資料の一部として活用いただければ幸いです。

今回、資料紹介をするにあたっては、多くの人々や関係機関から多大な御指導、御協力を受けました。快く資料を提供していただいた遍照寺住職の井上隆幸氏、個人所蔵の資料等の所在について御示唆いただいた錦町立西小学校長西武喜氏、資料の照会等で御教示いただいた熊本県文化課の諸氏、土器の実測および、遺物写真撮影に協力いただいた県文化課嘱託岡本勇人君にこの紙面をお借りして御礼申しあげます。

参考文献

1986　乙益重隆　『免田町史』

1976　緒方　勉　「中九州に於ける弥生後期土器について(一)」『熊本史学』第35・36号

1979　乙益重隆　「九州」『新版考古学講座4』

1983　高千穂シンポジウム実行委員会編『海と里と山の考古学』日・豊・肥・古文化研究会資料3

1984　肥後考古学会・鹿児島考古学会編『連合学会資料』

1986　木崎康弘　熊本県文化財調査報告第八十集『大丸・藤ノ迫遺跡』

1987　島津義昭・高谷和生　熊本県文化財調査報告第八十六集『下山西遺跡』

1993　最上　敏　熊本県立装飾古墳館「第3回企画展図録」『弥生人の祈り』

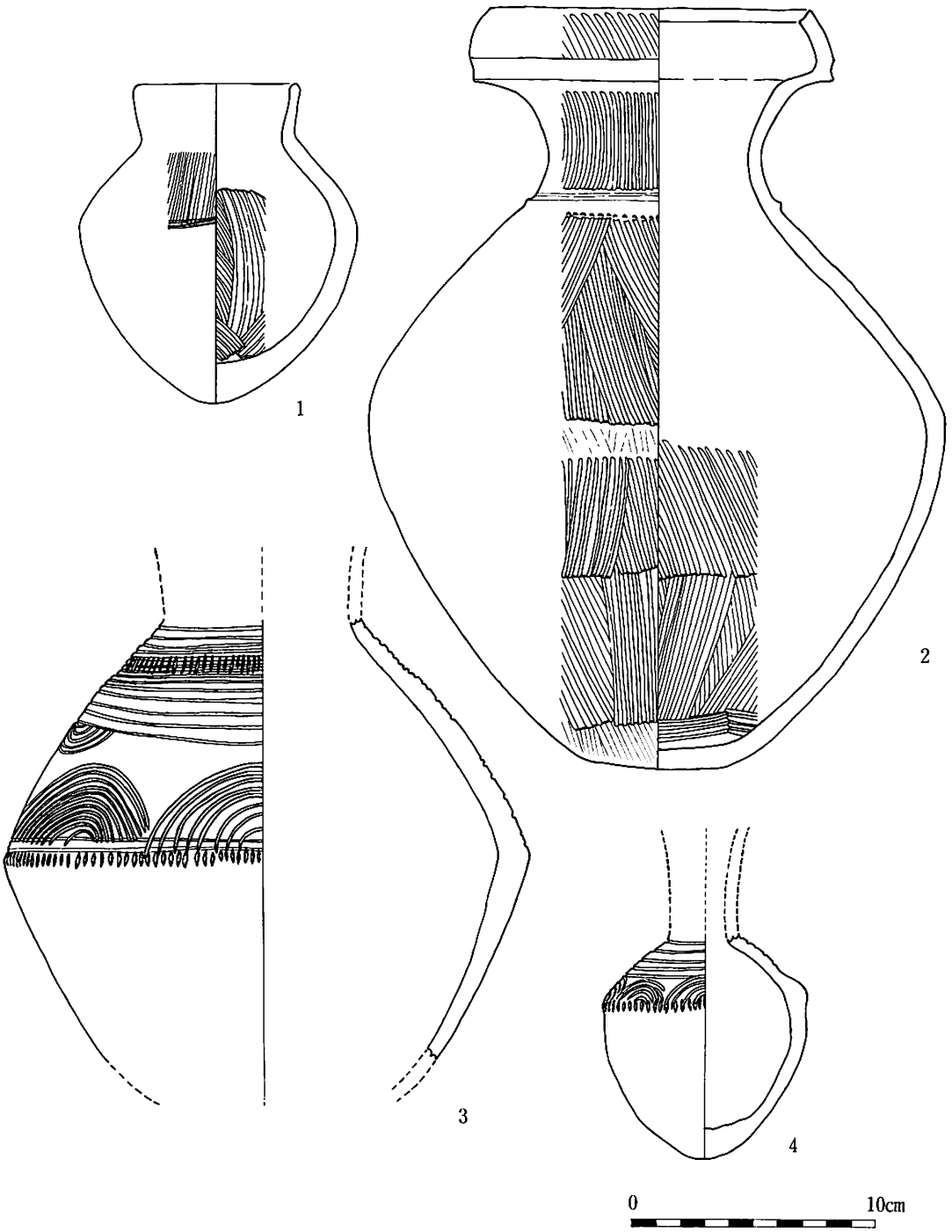
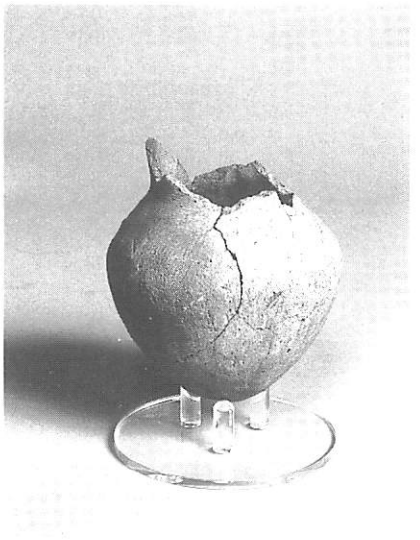


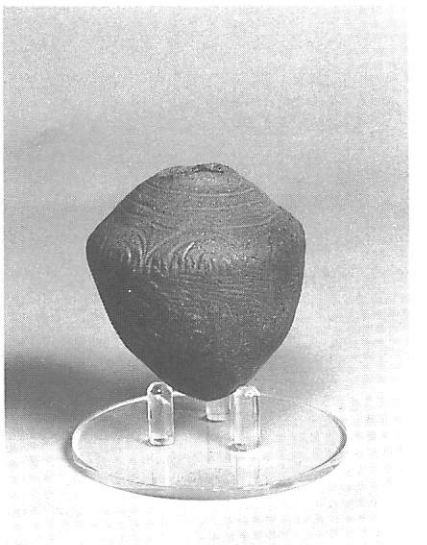
図1　井上隆幸氏コレクション



1

2

3



4

写真１　井上隆幸氏コレクション

種類	図版番号	特　　徴	備　　考
壺	1－1	●口頸部やや外反し、胴部張りが強くやや尖りぎみの丸底を成す。 ●口頸部から口縁部にかけて横ナデ。外面はナデ仕上げを施すが、胴部上半印毛目を残す。内面は底より強く印毛目仕上げを施す。	●0.5から1㎜の砂粒を若干含む。 ●焼成良好。 ●色調外面内面とも黄褐色を呈す。
壺	1－2	●口頸部外反し、口縁部は袋状を成す。底部はややレンズ状の平底を成す。 ●外面は全体に刷毛目仕上げを施す。口縁部は横ナデ仕上げを施す。内面は頸部付近まで底より強く刷毛目仕上げを施す。頸部から口縁部にかけては、ナデによる調整を施す。 ●器壁外面の胴部上半は剝離が強く認められる。	●0.5から1㎜の砂粒を若干含む。 ●焼成良好。 ●色調外面内面とも赤褐色を呈す。
壺	1－3	●口頸部及び胴部下半は欠損。外面は全体にミガキを施す。内面は剝離が強いために調整等は確認出来ない。 ●頸部より胴部にむかって14本の沈線を施す。胴部上半は棒状工具による重弧文を施す。	●0.5から1㎜の砂粒を若干含む。 ●焼成良好。 ●色調外面内面とも黄褐色を呈す。
壺	1－4	●口頸部は欠損。胴部最大径は上方に位置し、底部はやや尖りぎの丸底を施す。 ●外面は刷毛目の後ナデ仕上げ。内面はナデ仕上げ。指頭圧痕有り。 ●頸部より胴部にむかって4本の沈線を施す。胴部上半には棒状工具の重弧文を施す。	●0.5から1㎜の砂粒を含む。 ●焼成良好。 ●色調外面内面とも赤褐色を呈す。

注1　大正七年、免田町字本目乙三－六七番地で土地改良工事中に発見された。(免田町史より)

注2　現在にいたるまで、この見解について異論を唱える研究者は多い。その論点は「弥生時代後期の重弧文をもつ土器群はすべて免田式土器と呼んで差し支えはない。」とする意見と「あくまでもセットの中の1タイプとして重弧文土器が存在する。ゆえに従来呼称されている免田式土器は重弧文土器と改めるべきである。」との意見である。筆者はここでもう一度原点に立ち返って、免田式土器の呼称について考えてみたい。小林久雄氏が『弥生式土器聚成図録』で弥生前期に出現する重弧文土器と区別する意味で免田式土器を設定した。そこにおける分類の目的は様式としての免田式土器を提唱されたはずである。現に○○○式土器と呼ぶ場合、幾つかのセット関係をもって定義づけられている。この見解にたてば、重弧文の有る無しだけで免田式土器を語るのは些か乱暴のような気がする。まして「似て非なるもの」的な考え方には納得がいかない。南九州における一つの文化を語る指標として免田式土器を位置づけ、考えていかなければならないだろう。

注3　乙益重隆氏の調査による。詳細は免田町史に収録されている。

注4　このことを裏付ける好資料として、県文化課が平成3年に行った柏木谷遺跡（阿蘇郡久木野村）の調査があげられる。詳しくは、本報告が待たれるが、住居跡内の土壙から免田式土器の長頸壺と共に東九州系の壺形土器と中九州系の甕がセットになってが検出されている。

注5　現在各誌で報告される場合に使われる地名表はこのときの資料をもとに補筆しているものが多い。

注6　井上猪一郎氏は昭和10年12月28日、遍照寺の住職の長男として生まれ、幼少より石器や土器に興味をもち、高田素次氏や乙益重隆氏について、発掘調査にも参加された。中学時代には地元の考古学少年として全国紙に掲載され、将来は考古学の道を志しておられたが、若くしてその生涯を終えられた。その当時収集された遺物は地元の学校に保管されていたが、次第に散逸し、現在遍照寺で所蔵されているものが唯一残った物である。

注7　宮崎県高千穂町で、日・豊・肥・古文化研究会資料による。

注8　県文化課主幹島津義昭氏示唆による。

熊本県立装飾古墳館
研究紀要第１集

発行年度　平成４年度
編集・発行　熊本県立装飾古墳館
〒861－05
鹿本郡鹿央町岩原3085番地
印　　刷　下田印刷
〒860
熊本市南熊本３丁目１－３

この電子書籍は、熊本県立装飾古墳館 研究紀要 第１集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので､精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、全国の歴史博物館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：熊本県立装飾古墳館研究紀要 第１集
発行：熊本県立装飾古墳館
〒861-0561　熊本県山鹿市鹿央町岩原 3085 番地
電話：0968-36-2151
URL：http://kofunkan.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：西暦 2018 年 6 月 1 日